

論文審査の結果の要旨

氏名 竹内 修一

第2次世界大戦直後のフランス文学を代表する作家アルベール・カミュは、「不条理」の哲学を表現した小説『異邦人』(1942)と哲学的エッセー『シジフォスの神話』(1942)によって、文学思想界に多大な影響を与えた。理由なき殺人を犯して死刑の判決を受ける男を主人公にした『異邦人』以降も、カミュは死刑、テロリズム、粛清等の政治社会問題を考察しつづけ、1951年に『反抗的人間』を発表したが、戦後フランスにおける対独協力派の処刑、ソ連における反スターリン派の粛清という時代状況にあって、「犠牲者も否、死刑執行人も否」を掲げ、中庸を説くと見なされたカミュの主張は、多くの論争を惹起し、 Kommunismusを信奉する文学者・思想家たちの反発と離反を招いた。以来、「反抗が人生に意味を与える」という命題のもとに、不条理に対する人間的反抗を政治・社会・歴史・文学の分野で幅広く論じた本書は、作家自身が「もっとも重要な書物」とみなしていたにもかかわらず、正面から論じられてこなかった。

本論文「死刑囚たちの「歴史」 『反抗的人間』のコンテクスト」は、難解なこの書物に果敢に取り組み、カミュ自身が哲学歴史書としてではなく、ある特異な時代を生きた自らの経験と証言を書いたという創作の経緯をたどり、「死刑囚」の問題に焦点をあてつつ、同時代の政治社会および文学思想界の状況を復元し、作家の思想的輪郭とその変容の軌跡を明示しようとする野心的な試みである。第1章では『異邦人』を出発点とみなし、「不条理」「無関心」「死刑」等、カミュの重要な命題を剔抉し、人生および世界を「無価値」とみなす主人公に対して、裁判がいかなる名目で罪を創出し、差異化をはかり、死刑を宣告するかを、テキストに即して検討する。第2章では、自己の思想形成に影響を与えたニーチェ哲学とマルクス思想とを批判的に見直し、「不条理」から「反抗」の哲学へと転じる作家の思想的転換点を指摘する。第3章では、モーリアックとの論争を通じて、対独協力派の処刑に賛同した自己に対して懐疑と反省を抱いたカミュが、「エピュラシオン」すなわち異物を排除する思想と政治的メカニズムに関心を抱き、大革命におけるサン＝ジユストの立場に着目しつつ、「正義と殺人」がいかに歴史的に実現されてきたかを検証し、「テロル」と「死刑」の意義を問い直す作家の思考過程を彫琢する。そして第4章では、同時代のスターリンによる粛清に関して、「ブハーリン裁判」を具体例にとりつつ、なぜ死刑囚たちが従容として自らの罪を認め、処刑台にのぼったかを考察するカミュの著作は、基本的にはメルロ・ポンティが『ヒューマニズムとテロル』(1947)で展開する、自らの死の意義を「未来」に見出す人間像に対する批判として立論されていることを、論者は指摘する。

本論文は、同時代の文学者・思想家たちとの論争に関する新聞雑誌記事や、カミュが参照したフランス大革命からスターリン粛清にいたる歴史書を渉猟しつつ、死刑と死刑囚に関するカミュの論考を軸に思想的軌跡を描いた、論者の長年の研究成果である。ただし、先行研究に乏しいとはいえ、カミュ研究史における『反抗的人間』の位置づけが本論文で明確に示されているとはいえない。また、作品研究としては「文学革命」についても十分に言及されず、カミュが結論で主張する「中庸」思想がいかなる歴史的意義をもつのか、等々、検討し残された課題も多い。とはいえ、これまで研究されることの少なかった『反抗的人間』におけるカミュの論考と証言とを、同時代の思想潮流との関連で明確にした本論文は、独創的かつ有意義な研究である。以上から審査委員会は、本論文が博士(文学)の学位に相当するものと判断する。